

子どものための百科事典の評価

Evaluation of Children's Encyclopedias

大橋 紀子

Motoko Ohashi

Résumé

On children's literature numerous discussions have been made and innumerable papers have been written in Japan. Children's reference books, however, have seldom been taken up. Although encyclopedias are the basic reference books and a large quantity of them both for adults and children are published, there are few guides good enough for selecting the best ones. General consumers are unable to know even bibliographic data about the materials published as they are in the United States by, say, *Reference and subscription books reviews* and *General encyclopedias in print*. This fact largely depends upon the underdevelopment of evaluations and critical reviews in Japan and the methods for reviewing have not been established so far.

The main purpose of this paper is to present a bibliography of children's encyclopedias with critical annotations. Besides, this paper surveys the situation of evaluating children's encyclopedias in Japan and the United States, and describes problems encountered in preparing the bibliography. In conclusion, based on the survey, the author suggests realistic criteria for compiling desirable encyclopedias for children.

はじめに

I. 子どものための百科事典の評価

A. 参考図書としての百科事典

B. 百科事典の評価基準

C. 日本における評価

II. 注解書誌

A. 平凡社「児童百科事典」と

Compton's pictured encyclopedia

- B. 主題体系別百科事典
- C. 50音順百科事典
- D. 「世界こども百科」

III. 百科事典の評価と書評の問題

- A. 評価基準の問題
- B. 書評の価値
おわりに

はじめに

子どもの‘文学’については、多くのことが論じられて来ており、現在、論じられてもいる。これからもますます盛んに論じられるであろう。しかし、子どもの‘参考図書’については、ほとんど顧みられていない、と言っても過言ではなからう。そこで本稿はひとつの試みとして、子どものための百科事典について、日本ではどの位のことを論じられて来たか、この方面の先進国アメリカではどのような状況か、日本の場合、何が問題で、何が考えられなければならないかを、実際に注解書誌を作成しつつ探求してみようとするものである。

現在、日本ではかつてない程、百科事典の類が様々な工夫を凝らして出版されている。その種類は一般向、学習用を問わず、枚挙に暇もない程である。だが、選択購入するに当って、手引きとするものがあるか、ということになると、日本ではまだ残念ながらほとんどない。大体どの様なものが刊行されているか、ということすら素人にとっては捕え難いのが現状である。子どものための参考図書の世界、殊に百科事典については、まとまった調査・研究は未踏に近いのが日本の現実である。本稿がたたき台のひとつにでもなれば幸いである。

調査に当って様々な面で御助言を賜った都立日比谷図書館児童資料室の方々に、心から感謝の意を表する。

I. 子どものための百科事典の評価

A. 参考図書としての百科事典

最も基本的な参考図書である百科事典によって、大人は新しい知識を得、自分が持つ知識の確認を行い、子どもは専ら新しい知識を獲得する。当然、購入に当っては慎重かつ賢明でなければならない。図書館が購入する場合はもとより、個人が購入する場合でも、何らかの評価を下し、数ある中から選択購入するわけである。評価は必ずしも購入する当事者が行うとは限らない。事実上

は、出版社の広告リーフレットと、書評とを勘案して購入するというのが一般的な方法であろう。ではどのようにして、参考図書の書評が手に入るか。日本では参考図書の書評は未発達で、“選択の指針を得るのが困難な状況にある。”¹⁾一方、アメリカでは定期的に参考図書の書評を載せている書評誌があり、E. Whitmore が RQ 誌上で、“Reference book reviewing”の中に取り上げたところでは、次の5誌が記されている。²⁾ *Choice*, *Wilson library bulletin*, *Library journal*, *Saturday review*, および *Subscription books bulletin*。この内、百科事典の書評で定評があるのは最後の SBB である。SBB は現在では ALA 刊行の *Booklist* の中に “Reference and subscription books reviews” として収載されている。この他に百科事典の選択の指針となるのは、毎年刊行される S. Padraig Walsh の *General encyclopedias in print* (New York, Bowker) である。このふたつについては後で述べる。

次に、利用対象に従って編まれる多くの百科事典の中で、いわゆる「子どものための百科事典」と言う、その‘子ども’とはどの辺りの層を指すのか。諸文献から拾ってみると、

今村秀夫³⁾……小・中学生

半沢正時⁴⁾……幼児・小学生・中学生

弥吉光長⁵⁾……小学3年生～中学生(小学上級・中学向
百科を学習百科と別称)

S. Walsh⁶⁾……7才～14才

文部省の「小学校における学校図書館の利用指導」では百科事典の利用指導は、4年生で行われることになっている。ここでは一応幼児から中学生まで、と考えることにする。幼児に百科事典は必要か、というのは、また別の問題である。

B. 百科事典の評価基準

資料の選択購入の際に、常に変わらない一定の客観的評価を下すためには、評価基準がなければならない。それ

がなければ、その時々々の恣意的な印象批評に終わってしまうことになりかねない。参考図書の先達アメリカでは、*Guide of reference books*, Louis Shores の *Basic reference sources*,⁷⁾ その他数多くのものに百科事典の評価基準が記されているが、ここでは前に触れた S. Padraig Walsh が取り上げた着眼点を少し詳しく紹介し、特に子どものための百科事典を選ぶ際の指針として ALA の Reference and Subscription Books Committee の立てた九つのポイントと弥吉光長氏の著書「百科事典の整理学」の中から、子どもの百科事典の備うべき条件 5 項とを掲げる。

1. Walsh の基準

Walsh があらわした *General encyclopedias in print* は表題の示す様に、百科事典だけを扱った参考図書であり、1963年に創刊された。入手可能な英語の一般総合百科事典すべてに関する簡潔かつ包括的な案内書となることを目的として、毎年出されている。

著者がこれを編むに至った動機は、1963年当時のアメリカでは、*Booklist* 等の書評誌に、個々の百科事典の書評が載るに過ぎず、まとまった情報源が存在しなかったことによる。⁸⁾ そこで Walsh はあらゆる基本的なデータ・書評等を集め、これら最新の情報のある評価基準に当てはめて、本の形にすることを考えた。前年11月末までの資料によって次の年頭に刊行されるこの本の読者対象は、まず一般大衆である。「一般総合百科……」と表題にうたわれている様に、特定の主題百科は 2～3 の例外を除いて扱われていない。

1966年版では百科事典の当該年度版に関して、1965年11月に、編集者側が作成した質問用紙を出版社に送付し、これの回答をもとに、情報、統計データがまとめられている。

1966年版で取り上げられた一般総合百科事典は 34 種(合衆国で刊行され、小売価格 25 ドル以上のもの) その他 1 巻物、あるいは 25 ドル以下の安い多巻物とハンドブックはまとめて簡単に扱われており、絶版になった有名百科事典も同様に扱われている。更に Walsh は、この 1966年版で「百科事典の選び方」として、次の様な 12 項目をあげている。⁹⁾

1) 予算

予算を決めよ。価格のために質を犠牲にしないこと。

2) 対象年令

誰が使うのか決めよ。百科事典は特定の年令層と

目的を持っている。

3) 査定等級

内容の評価と対象年令層及び価格から。

4) 購入前の調査

最初のものに飛びつくな。自分の要求に合うか。

5) その他の評価法

この本にリストされている雑誌記事を幾つか、又は全部読んでみよ。ALA の *Booklist and subscription books bulletin* の最新版に載っている細かい評価が有益。(どこの図書館でも入手可)

6) 権威

参考図書の評価に当たって最重要項目のひとつ。編集者、執筆者の資格と能力。よい百科はこれらの人々の学術上及び専攻の資格と執筆分野をリストしている。¹⁰⁾

7) 新しさ

百科事典は作られた瞬間から古くなる。だが 70%～75%の資料はほとんど常に変らないことも忘れずに。残りの 25%～30%が最新であることが必要なのである。6ヶ月の遅れは作成上致し方がない。

8) 補遺

9) 正確さ

全く不案内な主題について引いてみる。次に精通している主題について引いてみる。両方共得心がいったら及第。

10) 配列方法

アルファベット順と主題別とある。どちらも一長一短だが、主題別は主として子ども向き。

11) 抱き合せ提供

辞書、地図帳、本箱等との抱き合せによる割引に要注意。

12) 苦情

新刊、無名のセットには要注意。特別提供等には気をつけよ。購入後の苦情はどこへ持ち込むか。(ALA 等へ)

1973年の第10版にも、ほぼ同様の指針があり 31種の一般百科(合衆国で出版、小売価格 30ドル以上のもの)、2種の主題百科を取り上げている。31種の百科事典は、それぞれ、①第1次選択(最高級) 8種、②第2次選択(平均以上) 7種、③第3次選択(平均的) 9種、④非推薦 7種と分けられている。記載事項は非常に多く、例えば(*The World book encyclopedia* (Chicago, Field Enterprises Educational Corp.) の場合(第1次選択)、8ページを費

し、次の様になっている。

- ・書名、等級(15がトップで0まで) 規模、対象年令
- ①出版社(所在地) ②出版略史 ③家庭向及び小売価格
- ④巻数、ページ数、総語数、項目数 ⑤目的及び適合年令層
- ⑥配列方法 ⑦表現方法 ⑧編集者氏名、等 ⑨執筆者
- ⑩主題範囲 ⑪索引及び参照 ⑫改訂計画 ⑬補遺
- ⑭挿図 ⑮地図 ⑯参考書目(書誌) ⑰形態 ⑱要約
- ⑲推薦文 ⑳批判的書評(掲載誌・紙名及び掲載年月日記載)
- ㉑その他書評、情報源(書名、誌・紙名、年月日)
- ㉒その他情報源 ㉓抱き合せ提供 ㉔出版社のその他の刊行物

以上、非常に実際的で教えられるところが多い。

2. 子どものための百科事典の基準

a. Reference and Subscription Books Committee の評価基準

ALA の Reference and Subscription Books Committee は、1970年6月15日の *Booklist* 誌上に、世の親達が生子どものための百科事典を評価する際の助として、“子どもの百科事典”という特集を載せた。¹¹⁾ そこに記されている着眼点は次の9項である。

- 1) 価格
予算は幾らか。価格は装丁によっても異なる。
- 2) 対象年令
- 3) 範囲及び客観性
- 4) 権威及び正確さ
精通している項目を読んでみる。(自分の住んでいる都市など)
- 5) 文体
概念が論理的に展開され、知的好奇心を刺激すること。(子どもにも読ませること)
- 6) 新しさ
宇宙探検、自動車のデザイン等、変化の激しい項目で引くとよい。
- 7) 配列及び構成
上手に構成され使いやすく、早く探し出せること。
- 8) 挿図と地図
挿図は単なる飾りでなく、本文を補うものであること。関係記事の近くに置かれていること。
- 9) 形態
美しく堅牢な造本で耐久性のある用紙。印刷は鮮明で、1ページ内に詰め込み過ぎないこと。ページを開いた時、平らになること。〔下線筆者〕

b. 弥吉光長 “子どもの百科事典” の備うべき条件

日本では、かねてから参考図書について種々の単行書を執筆している弥吉光長氏が、1972年「百科事典の整理学」と題して百科事典の選び方、使い方、百科事典小史をまとめた。第I章の“百科事典を選ぶとき”には、着眼点及びその各々について細かい記述があって、現在の日本では大変便利である。その中で、子どもの百科事典の備うべき条件として5項目があがっている。¹²⁾ 簡単にまとめると、

- 1) 範囲
- 2) 客観性と正確さ
- 3) 挿図と構成
- 4) 文体(表現)
- 5) 印刷と造本

ということになるが、4)については“こども百科は小学三年生でも理解できるようにやさしい表現と、多くの挿図を持っていなければならない。……”¹³⁾と述べられているが、“やさしい”というのは“調子を落す”ことではないことを強調しておきたい。アメリカの百科事典の場合には、1項目の中で表現法が段階的になっており、記事は単純な概念と文体で始まり、終りに行くに従って高度な概念と表現をとるようになっていく。¹⁴⁾

以上、様々に立てられた評価基準に従ってアメリカでは多くの書評が書かれ、選択が行われているが、日本の状況を次項で追ってみることにする。

C. 日本における評価

1960年以後、百科事典の刊行が盛んになるに従って、人々の関心は、百科事典へ向き、各種誌上でも百科事典はかなり論議・研究の対象となってきた。こうした機運の中から1965年、児童図書館研究会編の「児童参考図書解題目録(I)一児童百科辞典」(以後「解題目録」と記す)が編まれた。これを含めて今日まで、どの位の注解が行われて来たかを概観したのが第1表であり、2～3行の短い注解を除く、いわゆる雑誌論文、単行本等において、どの位子子どものための百科事典が紹介され、検討されているかの概観である。その後、「解題目録」と同じ1965年秋、「学校図書館」誌上に、“小・中学生向き百科事典”を今村氏が発表し、¹⁵⁾ 1966年、吉井善三郎等著「こどもと読書」、¹⁶⁾ 1968年、“児童百科事典の比較”(半沢氏)、「本とこども」(「こどもと読書」の改訂増補版)、¹⁷⁾ 1972年、前述の「百科事典の整理学」が発表された。¹⁸⁾ 「解題目録」に先立つこと約10年の1954年には大門潔著「児童のためのレファレンス・ブック」¹⁹⁾が図書館講座一整理編3として刊行され、これには12種の百科事典が平

均 140 字位の注解付で載せられている。この中で多少とも評価に関係するめばしい論文について、以下発表された年代順を追って述べることにする。

1. 児童図書館研究会編「児童参考図書解題目録(I)―児童百科辞典」東京、日本図書館研究会、1965. 36p.

1965年夏に出されたB5版36ページの小冊子。会員23人が調査した調査報告書で、17点の百科事典について、(第1表参照)一定の評価基準に従って行われた調査の研究報告を横浜市立図書館の半沢正時氏が責任編集したものである。その評価基準の概略を示す。

- 1) 編集者、執筆者、出版社
- 2) 範囲(内容)
 - (1)正確さ、(2)新しさ、(3)教科内容、(4)観点、(5)項目
 - (6)排列、(7)参照、(8)索引、(9)参考文献、(10)改訂
- 3) 読みやすさ
 - (1)文体、(2)漢字、(3)組版、(4)活字、(5)図版
- 4) 造本
 - (1)造本、(2)紙質

この目録では17点の事典について、書誌的事項の他、前記の基準に照らして各300字前後の注解がある。明らかにアメリカの評価基準の影響が濃いが、索引や参照が、「索引あり、参照あり」と言う表現で終らず、どのようなものか更に詳細に記すべきである。抽象的表現に終始しているので実体が浮び上らない。尚、この基準で日本固有の事項と考えられるのは、縦組か横組かの問題と、漢字のことである。漢字については、現在多くの百科事典がそうであるようにルビ付ならば、学年別漢字配当表にこだわることはない。

全体として、ここに述べられている基準が注解に十分には生かされていないという感じを免れないが、これには基準で測られた実物の側の問題と、注解の表現形式の問題の両方がからんでいる。だが、不満な点はあるにしても、このような手引きがせめて5年毎にでも継続刊行されていたらと、中途半端になっているこの事業を惜しむ。

2. 今村秀夫「小・中学生向き百科事典」

学校図書館, no. 180, 1965. 10, p. 13-7.

1. と同年の秋「学校図書館」が組んだ特集「百科事典出版の現状とその利用」の記事のひとつとして書かれ、筆者は現場の目でかなり細かく厳しい批判をしている。まず、子ども向き百科事典の範囲に言及し、「百科」の名が冠せられていても双書的な構成のものもあることを指摘し、これらが主題体系別百科事典ではないことを実例をあげて示している。ここで選ばれた百科事典は50音順配

列のもの4種、主題体系別のもの1種の計5種(第1表'65 今村欄●印参照)で、他に1冊ものについても多少言及している。5種を少し細かく検討し、特色を記しているが、殊に平凡社の「児童百科事典」に関しては、「子ども向き百科事典すべてをみくらべてみた時、平凡社の「児童百科事典」の右に出るものはないことを、いつでも、今さらのように感じる」²⁰⁾と絶賛している。

3. 半沢正時「児童百科事典の比較」

図書館雑誌, vol. 62, 1968. 10. p. 460-3.

1968年秋、「図書館雑誌」が図書館資料の内容検討という形で企画したコラム「参考図書ABC」の第5回として掲載された。オーソドックスに児童百科事典の意義から説き起こされている。3種の書誌の当該年度版に記載があり、かつ書店の店頭にあった14種をあげてある。それらについて、体系順か50音順か、それぞれの配列の長短・特徴について論じ、次に実物に当たって、「線香花火」という特定の項目について、上記のうち入手出来た10種の百科事典(第1表'68 半沢欄●印参照)を調べ、該当事項について何らかの記載があったもの7種につき、項目の出方、記載内容等を分析している。これはページ数の関係(B5版4ページ)もあってか1項目についてのみ論じられ、各事典についての全体的な概念が得られない。

4. 弥吉光長「百科事典の整理学」

東京 竹内書店 1972. 269p.

既に触れたように「百科事典を選ぶとき」という冒頭の第I章には、選択の基準を細かく記し、素人が選択する場合にはどのようにしたらよいかを、実物に即して具体的に記している。更に第II章「家庭ではたらく百科事典」では、まずこどもの百科事典を取り上げ、こどものための百科事典の必要性を説き、現行の7種の百科事典について書誌的事項と注解を与えている。すべて1/2ページ～1ページ程度の評価が加わった注解である。この程度の注解書誌でも、まとまって出版されれば、あるいは定期的に雑誌に掲載されるようになれば、ずっと利用しやすい便利なものになるであろう。

日本の場合には、すべてが単発的で、継続した力になり得ないことが問題なのである。

見て来た通り、評価基準や評価法(具体的表現法)は種々あるが、次章の注解書誌を作成するに当たっては、基準は一応「解題目録」を基礎に、表現形式はWalshの記述順序を参考にしている。

子どものための百科事典の評価

第1表 子どものための百科事典関係論文等一覧表 (1)

○=掲載

| 取り上げられた 百科事(辞)典名 | 出版社 | 出版年 | '54 大門 | '55 弥吉 ① | '60 芦谷 | '65 解題 ① | 同左 ② | '65 今村 | '67 長沢 | '68 半沢 | '69 事典 | '72 弥吉 ② | '74 弥吉 ③ | '75 辞典 | '69 総合 | '74* 総合 |
|---------------------|-------------|------|-----------|----------------|-----------|----------------|---------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------------|----------------|-----------|-----------|------------|
| 玉川学習大辞典 | 玉川大出版学 社 | 1947 | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | |
| 知識の宝庫 | 学習社 | 1949 | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 学生百科宝鑑 | 七星社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 学生百科事典 | 国民図書 行会 | " | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 学生自習辞典 | " | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 簡明学生百科事典 | 数学研究社 | " | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 簡明学習図解百科 | " | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 小学館学習新辞典 | 小学館 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 少年百科 | 日米出版社 | " | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 全科学習辞典 | 日本出版社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 図解新事典 | 国民図書 行会 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 学習大事典 | 博友社 | 1950 | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 玉川児童百科大辞典 | 誠文堂新光社 | " | ○ | ○ | | ○ | ● | | ○ | ● | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| たのしい小学生百科 | 羽田書店 | " | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 学習少年百科事典 | 東和社 | 1951 | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 児童百科事典 | 平凡社 | " | ○ | | ○ | ○ | ● | ● | ○ | | | | | | | |
| 小学生教室事典 | 牧書店 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 少年百科事典 | 東和社 | " | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 玉川こども百科 | 誠文堂新光社 | " | ○ | | | ○ | ● | | | | | | | | ○ | |
| 私たちの生活百科事典 | 生活百科 行会 | " | ○ | | | ○ | ● | | | | | | | | | |
| 学生の百科事典 | 中教出版 | 1952 | ○ | | | ○ | ● | | ○ | | | | | | | |
| 毎日学生事典 | 毎日新聞社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 小学生知識事典 | 小峰書店 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 小学生の百科事典 | 東和社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 学習新事典 | 誠文堂新光社 | 1953 | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 学生百科事典 | 旺文社 | 1954 | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 中学学習事典 | 旺文社 | 1955 | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| 百科学習事典 | 金子書房 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 生活学習事典 | 小峰書店 | " | | | | ○ | ● | | | | | | | | | |

第1表 子どものための百科事典関係論文等一覧表 (2)

○=掲載

| 取り上げられた 百科事(辞)典名 | 出版社 | 出版年 | '54 大門 | '55 弥吉 ① | '60 芦谷 | '65 解題 ① | 同左 ② | '65 今村 | '67 長沢 | '68 半沢 | '69 事典 | '72 弥吉 ② | '74 弥吉 ③ | '75 辞典 | '68 総合 | '74* 総合 |
|---------------------|--------|------|-----------|----------------|-----------|----------------|---------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------------|----------------|-----------|-----------|------------|
| 学生の百科事典 縮刷版 | 中教出版 | 1956 | | | | ○ | ● | | ○ | | | | | | | |
| 子ども百科12ヵ月 | あかね書房 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 日本少年百科全集 | 河出書房 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 私たちの学習生活事典 | 牧書店 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 中学生百科事典 | 平凡社 | 1957 | | | ○ | ○ | ● | ● | | | | | | | | |
| 学習百科大事典 | 保育社 | " | | | ○ | ○ | ● | ○ | ○ | ● | | | | | | |
| 目で見る学習百科事典 | 小峰書店 | " | | | ○ | ○ | ● | ● | | | | | | | | |
| 最新全科学習事典 | 向上社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 玉川百科大辞典 | 誠文堂新光社 | 1959 | | | | ○ | ● | | ○ | | | | | | ○ | |
| 目でみる学習百科 | 偕成社 | 1960 | | | | ○ | ● | | | | | | | | | |
| 絵でみるこども百科じてん | 小峰書店 | 1961 | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | |
| 学習百科事典新版 | 三省堂 | " | | | ○ | ○ | ● | | | ● | | | | | ○ | |
| 新指導要領による 中学学習事典 | 旺文社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 小学学習事典 | " | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 少年少女学習百科大事典 | 学習研究社 | " | | | | ○ | ● | ● | | | | | | | | |
| 少年少女学習百科全集 | 講談社 | " | | | | ○ | ● | | | | | | | | | |
| 幼児百科 | 学習研究社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 学生百科新事典 | 文英社 | 1962 | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | |
| 学習百科大事典 縮刷版 | 保育社 | " | | | | ○ | ● | | | | | | | | ○ | |
| 小学学習大事典 新訂版 | 講談社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 絵本百科 | 平凡社 | 1963 | | | | ○ | | ● | | | | | | | | |
| 学習総合大百科辞典 | 講談社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | |
| 標準学習百科大事典 | 学習研究社 | " | | | | ○ | | ○ | | ● | | | | | ○ | |
| マイクロ百科事典 | 講談社 | " | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | |
| 目で見る児童百科 | 偕成社 | " | | | | ○ | ● | | | | | | | | | |
| 旺文社スタディ百科事典 | 旺文社 | 1965 | | | | | | ○ | ○ | ● | | | | | ○ | |
| スクール図解百科事典 | 講談社 | 1966 | | | | | | | | ○ | | | | | ○ | |
| エース学習百科大事典 | 保育社 | 1967 | | | | | | | | ● | | ○ | | | ○ | ○ |
| えほん百科 | 平凡社 | " | | | | | | | | ● | ○ | ○ | | | ○ | ○ |

子どものための百科事典の評価

第1表 子どものための百科事典関係論文等一覧表 (3)

○=掲載

| 取り上げられた 百科事(辞)典名 | 出版社 | 出版年 | '54 大門 | '55 弥吉 ① | '60 芦谷 | '65 解題 ① | 同左 ② | '65 今村 | '67 長沢 | '68 半沢 | '69 事典 | '72 弥吉 ② | '74 弥吉 ③ | '75 辞典 | '68 総合 | '74* 総合 |
|---------------------|--------------|------|-----------|----------------|-----------|----------------|---------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------------|----------------|-----------|-----------|------------|
| 学習大百科 | 偕成社 | 1967 | | | | | | | | ● | | | | | | |
| 原色フレンド百科大事典 | 文英堂 | " | | | | | | | | ● | | ○ | | | ○ | ○ |
| 児童学習百科 | 研秀出版 | " | | | | | | | | ○ | | | | | | |
| 小学生百科 | 偕成社 | " | | | | | | | | ○ | | | | | | |
| クラウン百科事典 | 三省堂 | 1968 | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ |
| 学研学習百科大事典 | 学習研究社 | " | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 学習こども百科 | " | " | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | ○ |
| 原色学習図解百科 | " | " | | | | | | | | ● | ○ | | | | | |
| ジュニア学習百科事典 | 旺文社 | 1970 | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ |
| こども百科事典 | 小学館 | 1971 | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| 学習カラー百科新訂版 | 学習研究社 | 1972 | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | ○ |
| こどものための百科 | 世界文化社 | " | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 世界こども百科 | TBS ブリタニカ | " | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ |
| 学習百科事典 | 世界文化社 | 1973 | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| こども世界百科 | 平凡社 | " | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ |
| 世界ワNDER百科 | TBS ブリタニカ | " | | | | | | | | | | | | | | ○ |

注1 上段*印は論文等の書かれた年(西暦下2ケタ)

注2 上段°印は論文等の表題略称(各々次のものをあらす)

大門: 大門 潔「児童のためのレファレンス・ブック」

弥吉: 弥吉光長 ①「参考図書の問題」 ②「百科事典の整理学」 ③「参考図書」

芦谷: 芦谷 清「小・中学生向き参考図書について」

解題 ①児童図書館研究会編「児童参考図書解題目録(I)」でリストしたもの

②同上実際に解題したもの

今村: 今村秀夫「小・中学生向き百科事典」

長沢: 長沢雅男「参考調査資料概説」

半沢: 半沢正時「児童百科事典の比較」

事典: 坪田譲治(等)編「子どもの本の事典」

◎辞典: 佃 実夫, 稲村徹元編「辞典の辞典」(これは1975年10月発行。4種について短い注解付。本稿についての調査完了時であったため本文中では触れていない)注解付のものに限る

総合: 出版年鑑編集部編「辞典・事典総合目録'69」「辞典事典・総合目録'74」

II. 注解書誌

この注解書誌は、主として昭和40年以降に発刊された幼児から中学生に至る子どものための百科事典のうち、入手可能なもの9種と定評のある平凡社の「児童百科事

典」をアメリカの *Compton's pictured encyclopedia* との比較において取り上げたものである。図鑑百科と銘付ったものは除いたが、幼児向のものはごく絵本的なものでも取り上げてある。客観的な事実だけを述べるというよりは、むしろ若干の批判を加えてある。本書誌作成に

当たっては出版社への直接の問合せは原則として行わず、専ら、現物及び出版社の広告用リーフレット類によった。なお、それぞれの百科事典についての記述は以下の通りである。

- 1) 書名
- 2) 出版社
- 3) 出版年
- 4) 巻数等……巻数、総ページ数（別冊索引を含む）、総項目数（わかるもの）、大きさ（B5以外はcmで表示）、各巻又はセット価格（購入当時）
- 5) 対象年令……出版社の表示による
- 6) 配列方法……50音順か体系順か、組み方本文活字の大きさ
- 7) 編集者……監修者ほか（全巻同じで10名以下の場合には肩書共明記）
- 8) 執筆者……氏名明記か否か
- 9) 図版
- 10) 造本
- 11) 注解
- 12) 索引・参照

A. 平凡社の「児童百科事典」と *Compton's pictured encyclopedia*

「児童百科事典」

出版社：平凡社

出版年：1951年～1956年

巻数等：全24巻（第24巻は索引）8053ページ、2515項目（索引項目を含まず）、B5、各巻780円（元版上製本）830円（新版特製本）

対象年令：中学生（12才～15才）

配列方法：50音順、大項目中心、横組2段、8ポ

編集者：児童百科事典編集部（17名明記）、編集委員〔企画〕19名、〔編集〕6名、〔整理〕7名、〔図版〕5名

執筆者：氏名明記、ただし署名記事ではない

図版：白黒写真、2色刷主体

造本：堅牢、クロス装

注解：今に至るも語り草となるこの百科事典は、「あくまで児童の本であること……とくにあつかう事實は、利用の度を考慮して、能うかぎり、実際的にとりあげられた。……工夫しうることを、実験しうることを大いに利用されたい。……日本の事典であること……公正な目をもって、日本を正しく世界事情のうちに位置づけ、日本の特別な伝統をふたたびふりかえる観点をとった。」（まえがき）という姿勢と、「学問の正確さと、

視野の広さとを保つこと、問題をいきいきと、まざまざと表わすこと、しかも、中心を直接ついで簡明であること」（まえがき）という目標をかかげて編まれた。カタカナ50音順による24巻編成で、最後の巻は総索引になっている。本文を生かすために沢山の図版を入れたことが記されているが、白黒写真以外の主として2色刷の絵はなかなか工夫が凝らしてあって楽しい。表現は「である」調で、一度書かれた原稿を児童文学者などが、書き直して整えた、と言われるためか、読みやすい。しかし、ひとつの流れは確かにあるが、少し文学的に書かれすぎた感じがする。巻頭に「ここを読んでみよう」という見開きページがあり、例えば第15巻「テンソートテ」では、「物語の国へ」として、「名探といホームズ物語」「ミシシッピのうたい手、マーク・トウェイン」などの項目と所在ページがあがっている。これは、漫然とこの事典を読む者のための企画であり、これが編集のお手本にしたといわれる *Compton's pictured encyclopedia* の「Here and there in this volume」（このページはただ漫然と「読みたい」と興味を感じるものを探している時に……）役立つと書いてある。）の翻案である。項目から推測すると、歴史（日本史関係が多いのは言うまでもない）、地理、文学、動物、植物、工業・技術といったところに力が入っている。本文の活字は8ポなので幾分小さくルビは固有名詞以外、最低限しかふってない。クロス装による各巻は、1巻があまり厚くなく（約2.5センチ）、しっかりと造られている。

索引・参照：第24巻「索引」380ページ

カタカナ50音順索引で漢字表記を伴う。この索引巻にも「まえがき」と詳細な説明があって、しかも本文23巻全体を概観出来るような「巻別総項目表」（p. 3～16）、「部門別項目表」（p. 17～29）、「見るページ・たのしむページ」（p. 30～37：23巻中の原色版等別刷のページを項目別に示したもの）があるのは大変便利である。網羅的な索引で参照もかなり出ている。本文中に独立項目として出る場合の表示法が、すべてゴチックで、巻とページ数の見分けがつきにくい、という難があるほかは良く出来ている。索引とは別に、本文中の参照は、関連項目への参照が随時出されている。

Compton's pictured encyclopedia and fact-index 1951 ed. 15 v. F. E. Compton, Chicago, 1951.

平凡社の「児童百科事典」編集の参考にされたとも言われるこの事典は、1922年に創刊され現在は「pictured」

の字句を削り *Compton's encyclopedia and fact-index* と改称され、全26巻として出されている。*Fact-index* の部分は現在のものもそうであるが、各巻々末に組み込まれており、しかも後述する学研の「学習百科大事典」の索引と同じく、単にページ数が記してあるのみでなく、短い記事が載っていて、一種の辞典になっているのが特徴である。この点平凡社の索引とは形式が違うが、本文が大項目中心であること、「pictured」と銘打ってあるように挿図が豊富なことは、平凡社が参考にしたであろうと推察される。

1951年版の巻頭にある「編集者の序文」に述べられている「正確さ、学識、網羅的な包括範囲」「知識の生き生きとした問題と幅広い知識分野への最初の導入部」という考え方は、平凡社の「児童百科事典」の中に、そっくり理念として取り入れられている。更に、ヒントとなっていると思われるのは、次のようなところである。「私達がどの様なものを作ろうとしたかは、次の様に要約出来るであろう；すなわち、新鮮で生き生きと表現され、たくさんの挿絵で飾られて完全性や正確さを損わずに、物語の本の様に読みやすい百科事典的なもの。」これは更に四つの目標として、

- “(1) 正確さと視野の広さ
- (2) 興味深い扱い方、論じられる問題の最も目立つ面に力点を置くこと
- (3) 子ども向に「調子を落して書く」ことで読者の知能を辱めない様にして、簡潔で明快かつ直接的な表現を使うこと
- (4) 本文の記事を心の中に描き、生き生きと動かせる様に挿絵を豊富に入れること”(序文)

と述べられている。

この百科事典は *World book encyclopedia* と並んで最も優れた子どものための百科事典だといわれる (Walsh の中でも最高級のひとつに上っている。又、ユニセフ児童文化情報センター所長アン・ペロウスキー博士は、筆者の間に答えて、アメリカの公共図書館では、予算の関係から2種しか子ども向の百科事典を購入出来ない場合には、*World book* と *Compton* という事になっている、と言われた) だけあって、見事な方針を掲げている。書いてある言葉に過不足がない。そしてこの目標と方針が空文に終わっていないことは、その後この事典が受けている評価を見てもよく理解のいくところである。前記の目標(3)は平凡社版によっても考えられたポイントのひとつで「まえがき」の中に、「……若い年齢を考えて、わ

ざわざ、「児童のために」書くことは、いずれにせよ明白なあやまりである。児童は可能性である。事がらの正しさと、高さとは、あつかいかたによって、児童に全面的にうけとれるであろう。”と記されている。これこそは日本の児童図書の問題の中でも最も大きな問題点のひとつであり、20数年前の百科事典が掲げた高い理想を今日まで継承するものがないのは誠に残念なことだといわなければならない。

B. 主題体系別百科事典

1. 「学研学習百科大事典」改訂新版

出版社：学習研究社

出版年：1972年初版 1974年第17刷

巻数等：全11巻及び学習人名事典・さくいん

事典(計12巻) 7380ページ, B5

セット価 45,640円

対象年齢：小学1年～中学3年

配列方法：主題体系別

縦組3段, 10ポ

編集者：編集責任者一渡部ひろし、他に編集スタッフ名明記、各巻に7～11名の編集指導者及び4～6名の企画者

執筆者：氏名明記。各巻約33名前後(第2巻81名, 第8巻14名)延 424名, 署名記事

図版：オールカラー

造本：堅牢, クロス装

注解：1968年から70年にかけて刊行された全12巻ものの改訂新版である。全巻の構成は小・中学校の学習指導要領に大体沿って体系化されており、次のようになっている。

- ①日本の歴史 ②日本の地理 ③日本の産業 ④世界の地理・世界の歴史 ⑤政治・経済・社会 ⑥動物・植物 ⑦天文・気象・地球のすがた ⑧物質とエネルギー ⑨からだのしくみ・科学の応用・科学のあゆみ ⑩国語・美術・音楽・英語 ⑪数学・保健体育・技術・家庭 ⑫学習人名事典・さくいん事典

各巻頭に「この事典の使い方」のページがあり、その巻がどのような内容を扱っているか簡単な説明がある。例えば、第3巻「日本の産業」では、「この巻は、日本の国土のようすや、日本の人口、産業のあらまし、農業・林業・水産業の第1次産業、鉱業・工業・商業・貿易・交通の第2次・第3次産業を解説してあります」と記されている。しかし、全体を通しての説明がどこにもなされていないため、第12巻の索引でうまく

引き出せない時は、見当をつけて各巻の巻末索引に当たるより方法がなく不便である。各巻内の構成は①本文 ②整理と要点(2色刷、約10ページ) ③巻末索引、から成っている。巻によっては、学習のための資料(第5巻「政治・経済・社会」のp. 539-560 日本国憲法全文、教育基本法等)が付いているものもある。記事は大体署名入で、読みやすい調子になっている。‘です、ます’調。内容の新しさに関しては、人口等の数字は1970年の調査によるが、年表の事項は1973年までを含む。従って、1973年のベトナム休戦協定締結、チリの軍部によるクーデターが記載されている。しかし事項の収録の範囲と立場は、例えばベトナム戦争については全く触れていない、といった問題がある。

索引・参照：第12巻「学習人名事典・さくいん事典」660ページ

第1巻から第11巻までの小項目を中心に約7000項目を収録した一種の総索引として使用するよう書いているが、各巻の巻末索引に出ている事項がすべて含まれている網羅的な総索引ではない、と断っている。例えば、かつてイギリスの保護領であり、1966年に独立した南アフリカのボツワナに関しては、第12巻の「さくいん事典」には項目がない。第4巻「世界の地理・世界の歴史」の巻末索引を引くと「ボツワナ……271」とあって、この巻の271ページに出ていることがわかる。更にこの「さくいん事典」でコンピューターを引いてみると、

コンピューター……項目なし。“を見よ”参照なし。電子計算機で引くと、

でんしけいさんき [電子計算機]……⑨270

即ち、第9巻270ページに出ていることがわかる。次に第9巻の巻末索引で“電子計算機”を引くと⑨270と出る。しかし実際にはp. 520～22 “エレクトロニクスの応用”の中の“電子計算機への利用”がある。しかもこの中に“電子計算機(コンピューター)は人間社会を……”という表現を取りながら“コンピューター”という言葉からの参照がどこにもない。せっかく大部の美しい百科事典であるからもっと徹底した索引を付けて欲しい。ただし、この「さくいん事典」の特色は、これが簡単な事柄事典になっていることで、例えば次のようになっている。

にほんこくけんぽう [日本国憲法]……巻次～

1946年11月公布、よく年5月施行されたわが国の憲法。旧憲法(明治憲法)にたいして新憲法ともい

う。……

巻末索引の配列は、第9巻「からだのしくみ・科学の応用・科学のあゆみ」は3分野1系でなく、他巻と一致した方針をとっていないのは問題である。全体として参照が不足気味で不親切な感じがする。

2. 「標準学習カラー百科」

出版社：学習研究社

出版年：1969年～1970年

巻数等：全10巻 4858ページ B5

各巻 2,400円

対象年令：小学低学年～中学3年

配列方法：主題体系別(索引なし)

横組2段 10ポ

編集者：編集責任者一鈴木泰二、他に編集スタッフ名明記、各巻に4～8名の編集指導者及び4～5名の企画者

執筆者：氏名明記、署名記事

図版：カラー及び白黒

造本：堅牢、クロス装

注解：学習参考書として使うことを目的として出された。全巻の構成は大体学習指導要領に沿って体系化され、以下のようになっている。

①日本の地理 ②日本の産業 ③日本の歴史 ④世界の地理・世界の歴史 ⑤政治・経済・社会・学習人名事典 ⑥生物の世界 ⑦地球と宇宙 ⑧物質とエネルギー ⑨美術・音楽・国語・英語 ⑩保健体育・技術・家庭・数学

各巻頭に“この事典の使い方”のページがあるが、「学習百科大事典」と異なり、内容説明はなく、その巻が備えている構成上の特色についての解説がある。各巻は①本文 ②問題さくいん ③資料のページ ④用語辞典 ⑤巻末索引から成っている。“問題さくいん”は教科書の問題から抜き出した問題と、それに対する解説が載っているページを示した問題形式による一種の索引である。“資料のページ”には種々の統計表等が一括して掲載してある。‘用語辞典’は例えば第1巻の「日本地理用語辞典」、第7巻の「天文気象・地球用語辞典」という具合であるが、第9巻「美術・音楽・国語・英語」には付いていない。記事は一応署名入で、文は「学習百科大事典」よりは少し硬いが、高学年はこの方が読みやすいかもしれない。‘である’調。数字は統計等1969年までを含む。1頁の約半分はカラー写真、図版であるが、白黒写真にまで第3巻「日本の歴史」

子どものための百科事典の評価

のように3色(黄, ピンク, ブルー)をかけてあるのは感心しない。他の巻は白黒のままであったり、全体の統一に欠けている。

索引・参照: この百科事典の最大の欠陥は、総索引のないことである。主題体系別の事典が索引をもたないでは十分な活用は望めない。巻末索引があっても、どの巻に属するか判断に苦しむもの、あるいは数巻にまたがるものを探し出すことは全く不可能である。引く事典ではなく、教科書に密着させて読むことを主眼としているらしい姿勢を感じる。せっかく企画するのであるから、是非、索引は付けて欲しい。

なお、学研はこれと全く同じ構成で「新訂学習カラー百科」全10巻 1970年初版を出している。

以上の他、調査した「新訂」は1972年5月の新訂版第2刷であったための改訂が多少見られたことである。

両事典を第4巻「世界の地理・世界の歴史」で比較して見ると、はしがき、別刷カラー写真はすべて同じ、「この巻をつくった人たち」の欄は、執筆者が2名「新訂」の方が多いのを除いてすべて同じ、ページ数同じ、写真殆んど同じ。「現代のあらまし」(年表)の収録年同じ。ちなみに各々の初版年は、「標準」「新訂」共に第4巻は1970年6月20日発行、両事典共1975年夏現在発売中である。

3. 「玉川児童百科大辞典」

出版社: 誠文堂新光社

出版年: 1966年~1968年

巻数等: 全20巻及び人名辞典・総索引(計21巻) 9519ページ B5

各巻 2,200円 補遺あり

対象年齢: 小学高学年~中学以上

配列方法: 主題体系別

縦組 3段 9ポ

編集者: 監修一小原国芳, 編集総括一小原哲郎(玉川学園副園長), 編集委員32名及び編集部員3名

執筆者: 氏名明記(各巻異動あり)・署名記事

図版: 白黒及びカラー

造本: 堅牢

注解: 玉川学園は戦前から児童百科大辞典の編集をして来た、いわばこの分野での先達である。独自の教育理念を持つ小原国芳の構想のもとに、その編集方針も「教科書のように『学習指導要領』に沿って編集されているわけではありません。学問の体系にのっとって全人教育の立場から展開された、いわばそれ自身一つの

独自の教育計画なのです。”とはっきり主張がなされている。この様な主張のもとに全20巻の構成は次の様になっている。

①数学 ②物理 ③化学 ④科学技術 ⑤宇宙・科学史 ⑥地球 ⑦植物 ⑧動物 ⑨保健・体育 ⑩道德・宗教・哲学 ⑪国語 ⑫文学 ⑬美術 ⑭音楽・演劇 ⑮日本歴史 ⑯世界歴史 ⑰日本地理 ⑱世界地理 ⑲社会 ⑳家庭 ㉑別巻人名事典・総索引

各巻頭にある「玉川児童百科大辞典のじょうずな使い方」は短い1ページの中にはっきりとした編集方針と、簡潔で要を得た使い方が記されている。全体としてさすがによく配慮され、作られている事典である。入手の都合上、1970年に刊行された改訂版での調査でなく、旧版によるが、この時点でも、例えばコンピューターについては、第1巻「数学」第11章 p. 365~76に写真、図が多数入って、「デジタル型の説明」「電子計算機のなりたち」「計算のしくみ」「プログラムとプログラム内蔵方式」「電子計算機にできること」「電子計算機の得意なこと、不得意なこと」「社会への影響」「付 FORTRAN 語によるプログラム」と一通りの知識を得られるようになっている。表現は「である」調で少し硬いから小学5年生辺りでは難しいところもあるだろうが、平凡社と同じく、子ども向にと調子が落していないのは良い。本文の用紙がうすいクリーム色なのも目に快い。ルビがふってあって紙面が少しわずらわしいのを除けば、大人にもおもしろく読める。各巻末に、平均約2ページの参考書目掲載欄があり、関連の単行書、叢書があげてある。(著者/出版社/出版年/約50字位の注解)これは対象を中学・高校・一般としてある。更に50音順の巻末索引もある。写真や図と本文との関係もよく考えて配置されている。各巻の見返しに全20巻と索引の巻名と内容紹介(120字内外)が記してあり、これが便利な良いガイドになる。

索引・参照: 第21巻「人名辞典・総索引」483ページ 総索引の部分(192ページ)は第1巻から第20巻までの項目に関し、約3万2千項目を収録してある。参照の出し方に少し不満はあるが、よく整った索引で利用価値が高い。不満な参照のひとつはコンピューターで、これは他社と同じく項目がなく、又参照もない。「電子計算機」で出るが、これは全巻にわたって網羅的に引き出せる点が便利である。「人名辞典」は世界人名辞典として2200名を収録(286ページ、執筆者66名、編集部編)、署名原稿ではない。ひとりにつき約100字前後

の略伝だが、重要と思われる人物には1ページを割く(例: アリストテレス, アルキメデス, アンデルセン)。ただ総索引では, 人名を引いた場合でも「人名辞典」のページ数は指示されず本文中の記事に対してだけ参照が出るから注意を要する。

補遺: この事典は着実に補遺を出している。最初のうち非売品であったが最近では頒布するらしい。大体同じ形式で出されているので手元にある一番新しいものを見ると, 「補遺IV」(1974年12月20日発行, 64 p. 500円)

- ①この1年 ②大いなる海—海と船, 世界と日本人: 青い大陸は招く ③海岸線の生物たち ④サイエンスレポート ⑤冷えはじめている地球 ⑥子どもと読書 ⑦世界の人口と食糧問題 ⑧人物レポート ⑨文化・スポーツレポート

執筆者は異動があるが明記されており, 1名1記事になっている。即ち上記では9名が執筆している。このうち巻頭の①は常に尾鍋輝彦(お茶の水大学名誉教授)統計部分は常に浅井得一(玉川大学教授)が担当して, 同じ調子を維持している。この補遺の表現は全く成人向けであって調子が高く小学生には無理であろう。

C. 50音順百科事典

1. 「学習こども百科」

出版社: 学習研究社

出版年: 1968年

巻数等: 全10巻及び別冊分野別さくいん, 1538ページ,

1106項目, 31cm, セット価 9,000円

対象年令: 幼児~小学校中学年

配列方法: 50音順, 縦組, 10ポ

編集者: 監修—岡田 要(前国立科学博物館館長, 理博) 茅 誠司(東京大学名誉教授, 理博) 高坂正顕(前東京学芸大学々長, 文博) 平塚益徳(国立教育研究所々長, 文博) 索引編集責任者—松村彬夫。他に〔項目指導者〕①現場の立場から—小学校関係者5名 ②専門の立場から—教員・学術関係者18名(平均) ③心理学の立場から—数名〔内容指導者〕各方面の教員・研究員約30名(各巻異動あり)

執筆者: 氏名なし

図版: オールカラー

造本: 堅牢, クロス装

注解: この全10巻は, 現在(1975年)全15巻として刊行されている。10巻までは従来と同形式, 同体裁であって, 次のようになっている。

- ①あいすすけーと〜えんびつ ②おいかわ〜かも ③

- かもしか〜くわがたむし ④けいさんき〜じどうしゃ ⑤しば〜そば ⑥そめもの〜てつどう ⑦てつどうれんらくせん〜にっぽん ⑧にっぽんのしんわ〜ひし ⑨ひつじ〜みのむし ⑩みみず〜われもこう (⑪ことば ⑫かんじ ⑬かず ⑭ものなまえずかん ⑮せかいずかん)

以上各巻152ページ, 他に別冊として「分野別さくいん」

ここでは入手の関係上, 初版によった。1巻の中は, 絵や写真が紙面の約 $\frac{2}{3}$, 下 $\frac{1}{3}$ に主として解説が示されている。幼児では絵本の様に文章は親が読んでやり, 以後成長の度合に従って百科あるいは図鑑として使える。絵は, 動物の種類なども比較的よく描けている(例: 犬, 猫, 牛)が, 馬は文中で種類のことに触れながら, アラブ, サラブレッド等示されていないのは片手落ちであろう。宇宙旅行は人工衛星の項目中に記述があり, 単独項目ではない。これなど今や一考の余地がある。文章は, ‘です, ます’調で, やさしく比較的よく書けているが, 対象年令の上限は小学低学年ではなからうか。1巻があまり厚くなく, 平らに開けるのはよい。クロス装でしっかりしている。

索引・参照: 「分野別さくいん」63ページ

別冊索引は, ①動物 ②植物 ③体: 食物と栄養 ④地球—山や川 ⑤鉱物……という具合になっている(原文はすべて平仮名)ので, どこを引いたらよいかわからない場合には不便で引きにくい。例えば, コンピューターは, “暮じに使うもの(道具と機械)”か, “暮しを便利にする仕組”か考えてしまう(前者に出る)。ただしコンピューター, 電子計算機という項目も参照もなく, 計算機の項で次の様に出る。

けいさんき……

でんきけいさんき……

でんしけいさんき……

でんどうけいさんき……

この百科は, 百科事典の体裁をとった絵本なので, 索引があってもなくても子どもには大して無関係だと考えているのかも知れないが, 付けた以上は徹底して欲しい。一段上位の概念で考えてみるなど, 子どもには難しいことなのであるから。

2. 「こどもカラー百科」

出版社: 講談社

出版年: 1969年

巻数等: 全8巻及び別冊総索引, 1280ページ, 1416項

子どものための百科事典の評価

目、32cm、セット価 14,800円

対象年齢：～小学3年

配列方法：50音順、大・中・小項目併用、縦組、10ポ

編集者：監修一阿部宗明（東海区水産研究所）今泉吉典（国立科学博物館動物研究部長）尾崎 博（国立科学博物館地学研究部長）黒沢良彦（国立科学博物館動物研究部）佐竹義輔（前国立科学博物館植物研究部長）辻本芳郎（東京学芸大学教授）森 弥栄（東京農業大学教授）深山幹夫（千葉大学教授）横地千仞（神奈川歯科大学教授）他に編集委員13名，編集賛助員68名（幼稚園長，小学校教諭）

執筆者：氏名明記，68名

図版：オールカラー

造本：堅牢，クロス装

注解：小学校3年までの教科書に出て来る必修単元と知っておかなければならない項目等を学習指導要領に合わせて編集した。平仮名による50音順全8巻編成で，構成は次の様になっている。

①あ～え（あいさつ～えいよう） ②え～か（えき～かんさつきろく） ③か～こ（かんじ～ごむ） ④こ～す（こむらさき～すもっぐ） ⑤せ～と（せいざ～どうだんつつじ） ⑥と～は（どうぶつえん～はるのかだん） ⑦は～み（はるのくさ～みどりしじみ） ⑧み～わ（みなと～わん）他に別冊「絵さくいん」

これも学研の「学習こども百科」等と同じくやはり絵を見て楽しむもので，各巻頭に記されている“この本の使い方”で，“このシリーズは五十音順の百科事典の形式をとっていますが，項目は大・中・小項目の取り合わせで図鑑としても使えるようになっています。”と書いてある通りである。この百科は版が大きいせいもあって，2ページにわたる“この本の使い方”がかなり詳しく記されている点はよいが，目的が例によって“学習に役立つ”と片付けられてしまう。1巻の構成は，説明文が1頁の $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{4}$ 位。絵よりも比較的カラー写真が多く，例えば犬の項では他社のものではすべて絵か，絵と一部写真との組み合わせであるが，これは24種の犬はすべてカラー写真で示してある。大きさの比較に難がある。牛の項では絵と写真による構成で牛の種類，骨格・胃（簡単に反芻のこと）の他にコラム“おうちのかたへ”があり，ここで約680語程の歴史的な説明があり，“母と子の対話を育てるこどもカラー百科”という文句も幾分うなずけるところがある。興味深いのは第4巻160ページに「すもっぐ」と

いう項目があることで，この年齢層を対象にしたもので他社のものには，この項目は見当たらなかった。最少限必要なことは書いてある。これに比べてコンピューターは項目がなく，計算機の項の中で少し説明があるに過ぎない。表現は全体的にわるくない。ルビ付。第8巻（最終巻）の巻末に“知っておきたい人”（p.129-44）として，洋の東西古今の人物126人の略伝を各人120語位で載せている。他に“日本めぐり・世界めぐり”。全8巻が色別で美しいせいも子どもに人気がある。平らに開いて置けるから見やすい。

索引・参照：別冊「絵さくいん」63ページ，重要語の50音順索引，索引項目数 約6770

3. 「こども百科事典」

出版社：小学館

出版年：1973年～1974年

巻数等：全12巻，2112ページ，約700項目，27cm，各巻1,000円

対象年齢：3才～10才（小学中学年）

配列方法：第1巻～第8巻，50音順，第9巻～第12巻，

主題別（ただし項目別事典ではない），縦組，10ポ

編集者：監修一海後宗臣（東京大学名誉教授，文博，日本教育学会々長）下泉重吉（都留文科大学々長，日本生物教育学会々長，東京教育大学名誉教授，理博）山下俊郎（東京家政大学教授，文博，日本保育学会々長）編集委員 ①専門の立場から一教員・学術関係者約14名（各巻異動あり）②教員の立場から一約8名（各巻異動あり）

執筆者：氏名明記，ただし署名記事ではない。

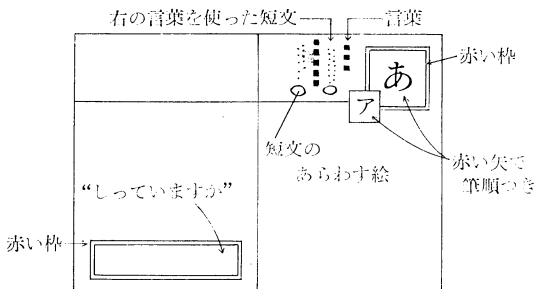
図版：オールカラー

造本：堅牢

注解：1970年に全8巻で刊行されていた同名の平仮名50音順百科事典 ①あ～え ②お～か ③き～こ ④さ～せ ⑤そ～て ⑥と～の ⑦は～へ ⑧ほ～わ，に，⑨ことば ⑩かず ⑪かんじ ⑫えいご，の4巻を新しく付け足したもの。子どもの年齢に応じて，絵本，図鑑，学習教科用としても使えるように編集された。旧版と比べると，中の項目も改訂増補され，表現も手を加えられて，わかりやすくなっている部分があるなど，多少進歩の跡がみえる。ただし，項目が多少増えたからと言っても1巻の総ページ数は旧版と同じなので，その分図版等が削られてつめ込まれた感じがする。改訂部分では，第4巻「さ～せ」を取り上げてみると，p.132-142の各大陸の絵が，旧版では戯画的で内海の

大きさ等あいまいであったのをかなり形や大きさを正確にし、細かい絵になっている点が良い。新しさの点では人工衛星の項の絵は幾つかの新しいものを付け加えている。1巻の中は絵や写真が1ページの約 $\frac{2}{3}$ 、 $\frac{1}{3}$ に主として説明文が(‘です、ます’調。ルビ付)入るといって他社と同様の体裁であるが、少しゴタゴタとつめ込みすぎている。絵は動物の種類など比較的よく描けているが、犬の場合、大きさの概念が不足気味である。学研の「学習子ども百科」と共に、犬、猫の爪の違いが出ているが、前者が肝腎の猫の爪は出し入れ出来ることに触れていないのに比べて、これではそのことにはっきり言及している。学研のものでは犬は“ばんをする犬 りょうではたらく犬……”というように分類して描いてあるが、これでは雑多な描き方で特別何をするかはわからない。牛の項でもそうだが、その動物が人間との関わりの中で何をしているのかの説明があいまいである。大きさが手頃なのか、子ども達に人気がある。ただし、第8巻まで。残りの4巻は学習本位でどれも盛り沢山過ぎるせいあまり人気がない。表紙は紙装だがしっかりとしている。開いた時平らにならないのは困る。

第9巻「ことば」の紙面は下の様である。



索引・参照：この百科事典には索引がない。絵本として、図鑑として使える、と学研と同様なうたい文句のせいかもしれないが、せっかく旧版には63ページにおよぶ50音順索引があったのに残念である。1971年3月に出たこの索引では、ちゃんとコンピューターから電子計算機への参照が出ている。旧版のものを改訂増補して出すべきである。

4. 「子ども世界百科」

出版社：平凡社
 出版年：1973年
 巻数等：全8巻及び索引、1191ページ、506項目、37cm、各巻2,300円

対象年齢：小学生

配列方法：50音順、大・中項目中心、横組、10ポ

編集者：監修一浅山英一(千葉大学助教授) 阿部宗明(東海区水産研究所) 浦本昌紀(山階鳥類研究所) 黒沢良彦(国立科学博物館) 瀬田貞二(児童文学者) 波部忠重(国立科学博物館) 古沢潔夫(東京大学助教授) この他第1巻に下保 茂(元東京大学講師) 第3巻に松沢正二(交通博物館)

執筆：画家等は各ページ毎に記載、一覧表なし。説明文の執筆者氏名なし。

図版：オールカラー

造本：堅牢

注解：第1巻の“使い方”のページに“この本は百科事典であるとともに、楽しい絵本であり、役にたつ図鑑でもあります。”と記してあるように、これも特色はやはり、“目で見える百科”であることである。これは“たくさんの文章よりも、一つの絵のほうが、物事のほんとうのすがたを知るためには、だいじだと思わからず”(p.7 “読者のみなさんへ”)という考えから出ているが、ここに記されているように、はっきりと主張が打ち出されている姿勢はさすがに百科事典の編集と出版に長い伝統を持ち、かって優れた「児童百科事典」を世に送った出版社である。カタカナ・平仮名50音順による8巻編成で、構成は次の様になっている。
 ①アイスホッケー～エックスせん ②エビ～かみ ③カメ～けっしょう ④ケーブルカー～しょうゆ ⑤しょくぎょう～チョウ ⑥ちょうこく～ねつとおんど ⑦ノアのはこぶね～ほし ⑧ホテル～ワニ 別冊として「全8巻さくいん」

“使い方”は第1巻にしか載っていないが(他社のものは大体各巻に載っている)、“項目のたて方とつながり”として第1巻の“魚”がどのような構成になっているかを例にとって、見開き8ページにわたって川魚・海魚・深海魚・熱帯魚・珍しい魚の絵が描いてあり、中項目への参照があって全8巻全体がつながって総合的、体系的な知識が得られるようになっていることを説明し、その重要性を説いている。各巻にはイソップ、グリム、アンデルセン、ギリシャ神話、古事記からの話が総計29入っている。説明文は少し難しいかもしれないが、子ども向けにありがちな調子を落したものでないのがよい。しかし、絵は犬などあまりはっきり特徴が描き分けられていないこと、細密画の場合(第2巻「エビ～かみ」のエビ等)は少しグロテスクな程、全

体に印刷の色がきつすぎる。もっと柔かい色が望ましい。牛の項もやはり絵が描き分けられていない感じであるが、何をするか、肉や毛皮や骨がどう使われるか、等が要領よくまとめられている。それだけに絵の調子と印刷色の調子をもっと良くなればずっと良いものになるであろう。コンピューターのことは「かず(数)」という項目の中に電卓のことが触れてあるだけで全く不十分。宇宙旅行は独立項目として出ており、米ソについてかなり細かい情報を提供してくれる。大人が読んでも結構楽しい。子ども向には超大型本で、あまり厚くなく、しっかりとして平らに開けるのは良いが、小学低学年には少し大型過ぎるのではなかろうか。

索引・参照:「全8巻さくいん」63ページ,全8巻に出ている絵について50音順索引。索引項目約1万4百。50音順による1系配列の他に全部の項目を21部門(①天文,宇宙,地球 ②地理 ③動物 ④植物 ⑤産業 ⑥交通 ⑦通信,伝達 ⑧道具,機械 ⑨物理,化学,数学 ⑩歴史 ⑪民俗,風俗 ⑫祭りと年中行事 ⑬社会 ⑭家庭〔衣・食・住に関係するもの〕 ⑮建築・土木 ⑯スポーツ ⑰遊び,レクリエーション ⑱人 ⑲食べ物 ⑳芸術,芸能 ㉑絵物語)に分類した“部門別項目表”がついている。これによって,この事典が“どの様な骨組で組み立てられているかがわかり,物事を順序立てて調べるのに”役立つ。

この索引もコンピューターではなく(参照なし),電子計算機で引くようになっていいる。索引の中の参照は少し足りない感じで,ソ連,ロシアからの参照がなく,ソビエトで出るなど多少問題があるが,本文中では例えば宇宙旅行の項から宇宙,太陽,月,ロケット,への参照が出る等気が配られている。

5. 「よい子に育つ子どものための百科」

出版社:世界文化社

出版年:1972年

巻数等:全18巻,945ページ・1巻平均46項目,31cm,各巻1,200円

対象年齢:幼児(幼稚園児まで)

配列方法:50音順,横組,12ポ

編集者:編集顧問-山口猪祐(日本私立幼稚園連合会前理事長)湯浅晃一(全国国公立幼稚園会長)

編集委員-尾崎博(理博)森久保仙太郎(児童文学者)服部公一(作曲家)

執筆者:画家名明記(各巻異動あり),説明文の執筆者氏名なし

図版:本文オールカラー

造本:堅牢

注解:“‘もの心がつく’頃から幼稚園を出るまでの期間”という“人間形成のうえで最も大切”な時期に“ほんとうにこどもが全身で楽しめるよう,絵本やレコードや新考案のワーク教材等で構成した,こどものための百科事典”(宣伝リーフレット)として出された。平仮名50音順による18巻構成で,以下のようになっている。
①あ ②い ③うえ ④お ⑤か ⑥きく ⑦けこ ⑧さし ⑨すせそ ⑩たち ⑪つてと ⑫なにぬねの ⑬はひ ⑭ふへほ ⑮まみ ⑯むめも ⑰や・ゆ・よ ⑱らりるれろわをん。

1巻の構成は本文,童話や民話(p.42-8)“たのしいワーク”(p.49-53,理解,判断等の指導のポイント指示をした学習用のページ)と別に各巻に①絵画制作教材(カード遊び,ペーパークラフト,シール)②ドーナツ盤ステレオ「うたとリズム」(4曲入)が付いている。童話や民話は,グリム,ハウフなどの再話,「たのしいワーク」は全巻を通して監修者と立案指導者が各1名別記されている。1巻の中の絵は平均16名位の画家が描いているが,あまりにも画風が異なり過ぎて統一がとれない。説明文が少ないためにそれが特に目立つ。一方で非常に細密画があるかと思うと次のページでは省略され戯画化されたものがあるという具合である。もう少し統一がとれたものにして欲しい。この百科で特色があるのは,項目として動詞と形容詞が入っていることである。“行動や思考をみちびく動くことば”という様に編集委員は書いている。例えば“およぐ”(泳ぐ)“おおきい”(大きい)などが項目として絵になっている。絵についている説明文は,いわば申し訳程度で長くて50字位であるから,この程度の表現で仕方がないのであろう。例えば馬の項,“うまはむかしからひとのせいかつにやくだつてきました。よくなれてはしるのがはやくちからがつよいからです。”(第3巻「うえ」p.19)ただし,このページの馬の写真(サラブレッド)はよくないし,絵は農耕馬というのに田も畑も描いてないので,実感がかめない。1巻の中に学習というので何もかも盛り込み過ぎてある。絵本の部分は絵本だけで徹底した方がよい。幼ない子ども向に比較的薄くできている。

索引・参照:絵本というわけで索引はない。この形式ではなくてよいであろう。

D. 「世界子ども百科」²¹⁾

「世界子ども百科」

出版社：TBS ブリタニカ

出版年：1972年初版 1973年再版

巻数等：全16巻及び索引，ほかに「おかあさまのための
手引書」2708ページ，448項目，24×21cm，セット価
29,000円

対象年齢：4才～9才

配列方法：英語の単語によるアルファベット順（50音順
による索引あり），小項目中心，横組，12ポ

編集者：日本語版監修—藤田圭雄。編集—木幡和枝，桜
内篤子，花島雪子，本間 淳，南 千春，森 敬子，
その他アートディレクター等，他にエンサイクロペ
ディア・ブリタニカ社の *The Young children's ency-
clopedia* の編集スタッフ名明記

執筆者：氏名なし

図版：オールカラー，ほとんど絵

造本：堅牢

注解：1970年アメリカの4大百科事典出版社のひとつで
あるエンサイクロペディア・ブリタニカ社が5年の歳
月をかけて作った全16巻2500ページにおよぶ英語版か
らの翻訳版である。全巻は原則として1字1巻による
アルファベット順18巻編成で，第7巻G-H，第8巻I-
K，第11巻N-O，第13巻Q-R，第15巻T-U，第16巻
V-Z が例外である。取扱っている主題範囲は，科学，
動植物，芸術，歴史，文化，地理，生活，思想，社会
と多岐にわたり，形式の面では，詩・劇・物語・ドク
ュメンタリーという扱い方をしている。原本は「こど
ものトレーニングに役立つ百科事典」（おかあさまの
ための手引書）を目指していて，子どもが幼い時から
物事を調べ，系統だった方法によって事実を突きとめ
る習慣をつけることを目的としている。日本のものと
比べて大きな差異を感じるのには，この事典全体につ
いての考え方，目的，使い方，特色等が，しっかりと書
かれているということである。日本の場合でも一応そ
れらしくは書いてあるが，多くの場合「学習に役立つ
ように」といったひとりで片付けられてしまう。

だが，この事典で問題なのは，全巻が英語の単語に
よるアルファベット順で，目次の項目が英語で出る
ということなのである。翻訳なので止むを得ないけれど
も，絵本として漫然と繰るには差障りが無いが，飛行
機は「ひ」でなく AIRPLANES でA即ち第1巻にあ
る。索引を引くという手数さえ嫌わなければ，非常に

よくできた細かい網羅的な索引が付いているから，こ
れで全巻中の記事に当たることはできる。例えばイヌ
を索引によって引いてみると DOG で D 即ち第4巻
p. 78-87 にこの項目で出ていることがわかる。ここを
見ると，ひとつの物語になっており，その中に様々な
種類の犬が出て来る。この14種の犬はすべて絵である
が細密画ではなく，スケッチ風である。しかし，大き
さの比較などはわりにはっきりとしており，この話
の中で各犬の特徴が自然に描き出されている。先程の索
引に出ていたあと4か所には，例えば盲導犬の話があ
る。物語形式というのが問題ではあるが，これらを総
合して犬の性質，人間社会との関わり，子どもの世界
での犬の全体像が浮び上がる仕組になっている。ネコ
はCATS が出るが，この方は，この項（「ネコのなか
ま」が話の見出し）の中で猫はいつから地球上にいた
か，エジプトではどういう風に考えられていたか，か
ら始まり性質や特徴に言い及んでいる。全巻ほとんど
写真はなく（例外としてはピエロ CLOWNS の項で顔
を作っているカラー写真等），すべて絵である。項目数
は決して多くないが，それだけに小さい子どもにと
ってはかなり十分と言える情報が得られる。例えばコン
ピューターの項では，何に使われているか，どうして
早く仕事出来るのか，ということの他に，コンピ
ューターに問題を解かせる前に，人間が解き方のプログ
ラムを組まなければならないことを付け加えている。
この点は多くの日本の同年令層を対象とした百科事典
が，「早く計算ができます。いろいろところで使っ
ています。会社でも駅でも使います」式の記述に終
っているのとは対照的である。大きさは日本のものよ
りずっと小型（ $2/3$ 位，厚さも少し薄い）で子どもにはこ
の方が持ちやすいであろう。表紙が色刷になっている
だけでゴタゴタしていないのは良いが，もう少し明る
い色の方が好ましい。平らに開けないのも不便である。

索引・参照：別冊「さくいん」164ページ，本文に出て来
る話の題目と重要語を収録し項目数1526。

索引がどうなっているかの例として，「さくいん」
の p. 1 の1部を次にあげておく。

第3表 「世界子ども百科」索引項目表^{注1}

| |
|-----------------------------|
| アイ……………あい INDIGO (インディゴ) |
| 4巻148-153ページ【せんりょう】 |
| あいず 合図・しんごう 注2……あいず・しんごう |

SINGS AND SIGNALS (サインズ アンド
スィグナルズ)

14巻^{かん}82-87ページ

2巻^{かん}92-95ページ【かね】^{あんこう}注3

3巻^{かん}112-117ページ【暗号】

4巻^{かん}134-137ページ【たいこ】

9巻^{かん}96-101ページ【灯台】

アイリッシュセッター……あいいりっしゅせったー

IRISH SETTER (アイリッシュセッター)

4巻^{かん}78-87ページ【イヌ】

- 注 1: 「世界こども百科」別冊「さくいん」p. 1 部分
注 2: 大活字による見出しは「もくじ」の項目
注 3: 【 】内は、合図・しんごうについて書いてある話の題名。「もくじ」には、これが出ている。

III. 百科事典の評価と書評の問題

A. 評価基準の問題

百科事典には限らないが、評価をするには評価基準がなければならぬことは自明の理である。「解題目録」にはアメリカの基準を参考にしたと思われる具体的な着眼点をはっきりと記されている。弥吉氏の著書には更に詳しい分析が載っているが、現実の日本ではせっかく立てられたこれらの基準が殆んど活用されていない。これらの基準を適切に活用すれば、百科事典の注解なり書評なりはもっと充実したものが数多く出てしかるべきである。書評が育ちにくいという土壌かもしれないにしても、現物の事典に関して考えてみる時、序文も満足についていない、あるいは付いていても中身とは具体的に関係のない、教育観のみに終始するだけの百科事典が、これも書架に並んでいるのは何故か。又、言語道断なことに、同じ中身のものが同じ時期に同じ出版社から表題の一部と編集責任者名（これが又実質的どの位責任を持っているか不明なのであるが）を変えただけで出版されるなどという事態になるのは何故か。²²⁾ モラルの問題というより、むしろ、大きく言って、子どものための百科事典に対するヴィジョンの欠落と言うべきではなからうか。必ずしもアメリカのものが全て良いというわけではない。だが、少くともきちんとした編集者が、数ページにわたって、きちんと編集の目的を披歴しているのである。更に、初版の刊行年、重版の度合、ということも一応明確である。日本ではそれだけのことさえ、出版社に問い合わせを行わず目の前の現物を手に取っただけでは、不明な場合が多い上、全体が何巻から成っているの

かさえわからないこともある。利用する方は、情報に頼じた図書館員ばかりではないのである。不親切と言うほかはない。評価基準以前の問題ではなからうか。

現在のところ、「解題目録」の評価基準は大変良く整っており、弥吉氏のそれは、各説と経験から集大成されて優れていると思うが、この基準によって測られるべき事典の方に問題があるのは第Ⅱ章で見て来た通りである。この基準に当てはめて欠落しているところは、それを指摘することにより、百科事典の水準を上げることが必要であり、子どもに関心を持つすべての人びとが、こうした子どものための参考図書について、抽象的でない論議をかわすべき時期であろう。

B. 書評の価値

「百科事典というものは、その性格を完全には知らずそれ自体を調べてみないでは、決して購入すべきではない。もし図書館員が十分な知識を持ち合わせていないならば、その百科事典が専門家によって調査、書評されるまで、購入は延期されるべきである。さもなければ、図書館費の浪費にならう。」²³⁾と1930年代に Isadore Mudge は記した。今日、我々も同じ様に考える。ここに示されるように、参考図書における書評の役割は誠に大きいと言わなければならない。そこで先に第Ⅱ章で触れた ALA の Reference and Subscription Books Review Committee による書評が、何故今日見るような権威を持つに至ったかを探ってみよう。

ALA が、図書館員と良心的な出版社の要望に応えて、Subscription Books Committee を設立し、公式の活動を開始したのは、1928年12月30日のことであった。当時アメリカでは既に予約販売方式が乱戦気味で、無益な買物から消費者を救うために、ALA は助言となるような機関紙 *Subscription books bulletin* を出して、同委員会にこの機能を果たさせることにしたのである。この委員会が初期に持っていた意図は、「百科事典予約販売のセットもの、その他種々の関連概説書類についてのまとまった助言サービス」²⁴⁾にあった。出される書評は年々長くなる傾向をたどり、1969年1月30日、SBCは同委員会の目的を一層よく示すReference and Subscription Books Review Committee と名称変更した。委員会メンバーは、アメリカ合衆国、カナダの図書館学校教員及び様々な規模と種類の図書館の館員から構成されており、初期の6人から現在は50人にまで増えてきている。任期は1～2年で、再任命されても6年以上継続は許されない。このメンバーになる者に対しても厳しい基準が設けられ

ており、*Subscription Books Committee manual*²⁵⁾の中に細かく記されている。その書評の方法は、まず委員会委員長が書評すべき本を選び出すと、委員会メンバーのひとりが指名され第1段階の書評を書く。この書評者が書評するに当たっても、先の *Manual* の中に細かく規定されているガイドラインに沿って行わなければならない。更にこの第1段階では、メンバーの内、誰かその分野に優れている者、経験者が、書評者に助力をする。こうしてできた草稿は、他の委員達の批判を受け、委員会全体の意向を反映するところまで練り直され、更に、出版される前に ALA の顧問弁護士のところへ送られ、言句の法的責任についてもチェックされる。

以上の様にして出された書評が、権威あるものと見做されるのは当然である。実際、前記の *Manual* が書評執筆のガイドライン、チェックポイント、表現形式に至るまで徹に入り細に亘って規定しているのを読むと、プロとしての意識の厳しさに打たれる。このようにして、今日、ALA は世界で最も有力な百科事典評価機関となり、又水準向上に積極的な力を持つ唯一の機関となったのである。

上述の委員会が出す書評が、対象をいかに細かく種々の方面からチェックしているか、興味のある方は一例として *Boooklist* 1973年12月15日号に載った *The world book encyclopedia* に関する書評を読まれるとよい。

おわりに

百科事典の評価の歴史を探り、事典そのものを調べてみた結果から、最後に、筆者の考える望ましい子どものための百科事典の条件を述べて、この稿を結びたい。

1) 目的

しっかりした編集目的を持ち、これを事典の中に具体化するための編集方針を打ち出したものであること。

2) 権威

一貫した編集責任者があり、全体としての統一がとれていること。子どもの図書の出版に豊かな経験と確かな見識を有する人びとが当たるべきである。編集委員の中には、幼稚園・小・中学校教員のみでなく、図書館員も含まれていること。執筆者は実力のある専門家であること。

3) 項目の選択(範囲)

子どもの世界、生活に結びついたものであること(学校で教える教科内容のみでないこと)。

4) 文体

簡潔で直接的な表現であること。勿論、読みやすいものでなければならない。そのためにはルビがふってある方がよい。ただし、子どもだからと言って調子を下げないこと。長い記事の場合には、ごく一般概説的なことから漸次段階的に高度な内容へと進むのが望ましい。

5) 配列と索引

できれば大・小項目併用式による50音順。網羅的な索引が付いているもの。子どもが日常使っている語句からの参照がしっかりしていること(索引においても)。

6) 参考文献及び照会先

次の段階へ発展できるように、項末には参照が十分に出ており、更に参考文献(単行本、雑誌記事、視聴覚資料)と照会先が明記されていること。それらは常に改訂されるべきであること。

7) 挿図類

本文の理解を助ける様な挿図類(地図、図表等)が適切な場所に入っていること。よい色刷が望ましいが、写真の場合は無意味に色を付けたものでなく、場合によっては白黒で優れたものの方がよい。地図は、地理項目の場合、必ず本文の近くに入っていること。いずれの場合も、大きさが配慮してあること。

8) 改訂企画

改訂の計画がしっかり立っているものであること。又、どの様な形式でそれが行われるかが明白にされていること。年鑑である場合は索引が整っていること。

9) 形態(外形)

①活字は子どもだからと言って大きすぎない方がよい。本文は9ボか10ボが望ましい。見やすいレイアウト、行間がとってあること(殊にルビがわずらわしく見えない配慮が欲しい)。

②ページ付はページの隅で、見やすいところに印刷されていること。(幼児・低学年向けの日本のものでは、ページ付が各ページの下部中央のため、目次や索引から引く場合に探しにくいものがある。例:小学館「こども百科事典」、学研「学習こども百科」など)

③印刷は鮮明であること。ただし色刷はきつくなり過ぎないように注意し、目に快く映るものであること。

子どものための百科事典の評価

④用紙はあまり薄過ぎず、大勢の使用に耐えられるものであること。

⑤造本は堅牢で美しいこと。しかし、年令層の低い者向けは、子どもにおもねってやたらに飾らないこと。(講談社の「こどもカラー百科」は、全8巻を1巻毎に色刷にし、それぞれ濃淡だけで仕上げている。これなど好ましい例のひとつである。)

⑥ページを開いた場合、平らになること。

こうした百科事典が送り出されるように、現場の図書館員達がもっと発言し、それに耳を傾けてくれる出版社が増えること、又、書評者が積極的に適切な書評を行うことで参考図書出版のよい刺激となることが望まれる。

- 1) 長沢雅男. "参考図書の書評," *Library and information science*, no. 9, 1971. p. 288.
- 2) Whitmore, Harry E. "Reference book reviewing," *RQ*, vol. 9, no. 3, Spring 1970. p. 222.
- 3) 今村秀夫. "小・中学生向けの百科事典," *学校図書館*, no. 180, 1965. p. 13.
- 4) 半沢正時. "児童百科事典の比較," *図書館雑誌*, vol. 62, 1968. p. 460.
- 5) 弥吉光長. 百科事典の整理学. 東京, 竹内書店, 1972. p. 48.
- 6) Walsh, S. Pdraig, comp. *General encyclopedias in print, 1973-1974*. New York, Bowker, 1973. p. 14.
- 7) Shores, Louis. *Basic reference sources*, Chicago, ALA, 1954. p. 65-6.
- 8) Walsh, *op. cit.*, p. vii.
- 9) Walsh, S. Pdraig, comp. *General encyclopedias in print*. 5th ed. New York, Bowker, 1966. p. 5-7.
- 10) 日本では、ここが一番はっきりしない。〇〇大学教授何某とあっても、専攻は不明である。
- 11) "Children's encyclopedias and sets," *Booklist*, vol. 66, no. 20, June 15, 1970. p. 1224-5.
- 12) 弥吉, *op. cit.*, p. 43-4.
- 13) *Ibid.*, p. 48.
- 14) *The world encyclopedia*. 1972 ed. Chicago, Field Enterprises Educational Corp., 1972. "Preface" にもうたっている。
- 15) 今村, *op. cit.*, p. 13-7.

なお、本年(1976年)8月学校図書館は再び百科事典の特集「百科事典の出版・選択・利用」を載せた。これには「〈アンケート〉わが校で備えている百科事典」という項があり、興味深い。

- 16) 吉井喜三郎 [等]. こどもと読書. 大阪, 林出版, 1966. 223 p. (中林ホームライブラリー, 1)
- 17) 吉井善三郎 [等]. 本とこども. 東京, 国土社, 1968. 221 p. (ホームライブラリー, 8)
- 18) 他に次の3点がある.
坪田譲治 [等]編. 子どもの本の事典. 東京, 第一法規, 1969. p. 458-61.
弥吉光長. 参考図書の解題, 東京, 理想社, 1955. 259 p. (図書館実務叢書 8)
弥吉光長. 参考図書—その原理から利用まで—. 東京, 理想社, 1974. 210 p.
- 19) 大門 潔. 児童のためのレファレンス・ブック. 東京, 春陽堂書店, 1954. 21 p. (図書館講座, 整理篇 3)
- 20) 今村. *op. cit.*, p. 14.
- 21) 原題は *The young children's encyclopedia*.
- 22) アメリカでも同じ内容のものが異なった表題で出ている例はあるが、表題ページでそれが明確にされている。*Compton's young children's precyclopedia* と *The young children's encyclopedia* がそれである。
- 23) Mudge, Isadore G. *Guide to reference books*. 6th ed. Chicago, ALA, 1936. p. 39.
- 24) "The Reference and Subscription Books Review Committee; its purpose, history and method of reviewing," *Reference and subscription books review*, 1968-70. Chicago, ALA, 1970. p. 145.
- 25) *Subscription Books Committee manual*. Chicago, ALA, 1969. 64 p.

参考文献

- 芦谷 清. "小・中学生向けの参考図書について," *学校図書館*, no. 119, 1960.6, p. 27-31.
- Book selection policies and procedures: appendix A, selection policies for children's books*. Baltimore, Enoch Pratt Free Library, 1950. 13 p.
- "Forum on encyclopedias," *RQ*, vol. 5, no. 2, Winter 1965. p. 3-16.
- 石山 洋. "百科事典の比較," *図書館雑誌*, vol. 62, 1968.6, p. 32-5.
- Katz, William A. *Introduction to reference work: vol. 1, Basic information sources*, 2nd ed. New York, McGraw-Hill, 1974. xiii, 361 p.
- 古賀節子. 学校図書館のための資料収集マニュアル. 東京, 酒井書店, 育英堂. 1971. 101, 4 p.
- 長沢雅男. 参考調査資料概説. 東京, 三田図書館学会, 1967. p. 34-45, p. 150-69.
- Shores, Louis. "Judging an encyclopedia," *RQ*, vol. 4, no. 1, Sept. 1964. p. 3-5.
- 都立中央図書館一般参考室. "世界の百科事典," *ひびや*, no. 119, 1975.7. p. 3-20.
- 佃 実夫, 稲村徹元編. 辞典の辞典. 東京, 文和書房, 1975. p. 17-9.